

# 台湾地方都市の音楽生活

## —— 1970年代の台南を例に ——

高橋明郎

### 0. 緒言—本論文の狙いと資料

文化活動を見る場合、全国的な活動、もしくは首都での活動は比較的跡を辿りやすいが、地方の状況を辿るのは簡単ではない。筆者は中央の政策の地方文化への影響を考えるため、まず、文学創作の面で、台南地域の青少年雑誌をもとに考察を行った<sup>1)</sup>。本稿では、地方都市の芸術活動について具体的活動をもとに考えたい。

まず、対象地域として、既に文学活動に関する状況についてまとめたのと同じ台南を中心に考える。台南は台湾に於ける嘗ての文化中心地であり、伝統文化が根付いている地域であることも理由の一つである。

時期的には、今回民國 65 年 (1976) を切り口とする。前掲論文に於いては、雑誌刊行期からこの時期周辺を中心に考察したが、今回特に中華文化復興運動の名目で中央の文化指示が強まった時期ということから、選択した。

台南の音楽に関しては王子妙の『台南音楽発展史』(2006.3 台南)が有る。本書は台南市政府などの補助を得ているものの自費出版形式の書籍である。王子妙は台南音楽界の重鎮で、2002年には『台湾音楽発展史』を上梓しているが、『台南音楽発展史』は大きなトピックを時期順に並べ、一つ一つに短いメモ(多くは4, 5行程度)を記したものであり、台南の日常的な音楽行事まで扱ったものではない。

---

1) 高橋明郎「台湾の地方青少年向け出版物の機能—『南市青年』と政治記事」(『香川大学経済学部研究年報』56, 2017.3)

そこで、本稿では主資料として「中華日報」南部版を使用する。中華日報は北部版も併せて全国をカバーした新聞であるが、もともと台南を拠点とする国民党系新聞であった。掲載される南部地域以外の情報は、台南の人々が知り得る情報の範囲を知る手がかりともなる。なお、文中（ ）付で日付が付されているものは、民國 65 年当日付「中華日報」が出所であることを示す。

## 1. 民國 65 年台湾音楽界の話題

最初に、台湾全国規模の主要な行事を幾つか挙げておく。概ね以下の事柄は、全国規模で報道されたものである。

### 1.1 コンクール

愛国音楽家黄自記念歌曲創作奨の第 6 回コンテストが 9 月に教育部主催で行われた<sup>2)</sup> 条件は①反共復国の心を奮い立たせる②各クラスや学校の卒業歌に使用できる③教育的意義を有する④国家建設を宣揚する⑤大自然を賛美する、の何れかの条件に合致するもの。五線譜に記入<sup>3)</sup> 生徒が応募の場合は音楽科主任の推薦を要する。合唱曲は 25,000 元、独唱曲は 15,000 元の奨金が与えられた。

### 1.2 教育

音楽重視の学校というのは存在はしていた。台北市立敦化小は全学年、全クラスに楽隊と合唱団があった。楽器は生徒持ちでアコーディオン、ピアノ、鉄琴、木琴、トライアングルなどからなり、買えない場合自作することもあった (3.8)。

この時期には音楽実験班と称する音楽強化クラスが試行されていた。9 月 14 日には、音楽実験班の評価が行われた。対象は台中の雙十国中、光復國小、台北の福星国小で、視察の結果、一定の成果はあるものの体系的音楽教育を確

---

2) 黄自は多くの抗日歌曲を作曲した。上海管弦楽団の創設者でもある。なお黄自を記念するコンクールは民國 61 年 (1972) 黄自作曲の歌曲を対象に南部 7 県市で行われたのが嚆矢である。王子妙が企画し台南の放送局が主催した。([台南音楽発展史] p 33)

3) 台湾では教科書を含め、中国と同様数字式の楽譜を使用することが多かった。

立する必要性が指摘された。光復国小は中国の調性を中心に据えていることが高く評価された。今後の課題として、児童の選別の際には器楽演奏だけでなくリズム感、音響の判別などもチェックすべきだとし、更に現在の音楽実験班が小学校中学年開始なのを1年生開始に改めるとともに、実験班の子の進路となる高校、ひいては音楽大学の設置を急務とした。

結局、実験班について、台中の2校は台湾省交響楽団、台北の1校は台北市交響楽団が楽器教育に関わることになり、高校段階について台北地区で先行すると決まった。高校では、生徒はそれぞれの高校に在籍したまま、団の宿舎に住む。また彰化教育学院に音楽学系を作り、高校生への個別指導と、専門家、教員を育成するという青写真になっていた。

一方8月14日には林栄徳が留学中学んだオルフ教育法をまとめると紹介された<sup>4)</sup>。林栄徳はペープリングン市立音楽学校でピアノを教えた経験が2年間ある。彼のまとめた教材は、バッハ、バルトークの小品、ロココ舞曲集、インヴェンション、ソナタ集、児童用ハノン、児童ブルグミュラーなどからなる。台湾では台北・台中・台南・高雄に教室を開設する計画であった。

### 1.3 話題の公演

話題の音楽公演は次のようなものが有った（台南でも公演が行われたものについては本稿2で記す）。

ヴァイオリンの簡名彦が卒業帰国演奏会を開いた。台北市交響楽団とシベリウスのヴァイオリン協奏曲を演奏。彼は13歳でジュリアード音楽院に留学した「天才少年」で、ガラミアン（同じ時期、同じアジア人である韓国の鄭京和（チョンキョンファ）を弟子にしていた）に師事、この3年前にも一時帰国し演奏会を開いている。新聞の取材に対し、今後は15年前に設立されたニューヨーク児童交響楽団（台湾にあり、外国人子弟がメンバーであった）の活動を引継ぐ。これを国際児童交響楽団に拡大し、ニューヨーク児童交響楽団を核に

---

4) オルフシューレバルクはドイツの著名な作曲家カール・オルフの提唱した子供の音楽教育法と教本。因みに日本では1960年代前半には輸入されている。

台北支部に、他にパリにも支部を置きたいとしていた(9.14)。

6月4日には台北の中山堂で文化学院が中心となって「タンホイザー」を上演した。指揮は米国籍で台湾に3年居住しているパクター、タンホイザー役テナーは米国人、ハインリヒ王のバスはフィリピン人といった内外混成である。教育部はこの公演のために台湾を訪れた演奏家を招き、初日の翌日茶会を開催した。

また6月30日には日系人でエール大学ヴァイオリン教授のアン晶子マイヤーズ独奏会が予定されていた。しかし、台湾の前に日本公演が有り、その期間中に夫が体調を崩したため、台湾公演をキャンセルしてそのまま米国に帰国した。

プロの演奏以外に、アジア作曲家連盟中華民国総会と山葉音楽振興基金主催で、4月3日に台北市中山堂で「中日児童演奏会」が行われ、その模様は二日後華視で放送された。

#### 1.4 国際的音楽行事

アジア太平洋文化社会中心第2回音楽会議と亞洲曲盟(アジア作曲家連盟)第4回大会が11月26日開幕。20の国と地域の代表、オブザーバー150人も参加。会期は1週間で、会期中アジア音楽週として中山堂・実践堂で7つの音楽、舞踏公演が行われた。中・日・韓・フィリピン・シンガポール・タイ・インドネシア・オーストラリアなどの50余の代表とオブザーバーが参加し「伝統音楽の過去現在未来」をテーマに国父記念館で会議があり、台湾(記事では中国代表)は鄧昌国ら14人<sup>5)</sup> 亞洲曲盟大会は上記にマレーシア・ニュージーランド・独・仏・伊・オーストリア・カナダ・米国・英国・スイスなど

---

5) 国父記念館での4報告は、中華民国の李抱忱「中国音楽特性」、日本の上参御佑康教授「音楽的芸術形式」、韓国の李相萬「韓国伝統音楽の基本特徴」、カナダ在住の梁銘越教授「中国伝統文化和音楽的特性」。その後音楽節二日目に「アジア現代作曲家管弦楽和室内楽発表会」があり台湾省交響楽団がシンガポール・日本・香港・タイ・フィリピン・中華民国の作曲家の現代曲を演奏した。作曲家連盟の4回大会では韓国の李惠求博士「古代韓国音楽與中国、日本の歴史關係」、韓国の李誠載教授「以韓国音楽作為現代音楽的泉源」。

20 か国代表とオブザーバー 100 人以上、「アジアの古代音楽を現代音楽の源に」と題して行われた。音楽週は中国伝統音楽鑑賞，アジア現代音楽発表，アジア現代室内楽演奏会，中国インドネシア韓国伝統音楽の夜，日本フィリピンオーストラリア伝統音楽の夜，中国戯劇及び舞踏の夜などの公演があった(11.22)。

### 1.5 国楽・国劇

日本で「邦楽」と称する類のものを，台湾では「国楽」と称する。胡弓や琵琶といった中国の楽器を使用した音楽である。また国劇と言っても，もともと台湾で行われているのは歌仔戲などであったが，国民党政府と移ってきた外省の人たちには，当然それぞれの出身地なじみの劇がある。北方の平劇<sup>6)</sup>は，中でも勢力があったものとはいえ，もともと台湾に根があるものではないので，そのままでは維持は簡単ではなかったであろう。おそらく軍の劇団やこの時期の文芸復興委員会の後押しがなければ衰微していった可能性がある。6月21日付けの記事で，台湾に於ける平劇にまつわる幾つかの課題も指摘されている。

10月末に蔣公九秩誕辰を記念して，軍中劇団が合同で6公演を行った。陸光，海光，大鵬，明駝の4劇団で，三軍一体の精神を体現し，復興民族文化の遺訓を貫徹するためとされた。25日は「四郎探母」，26日「鎖麟囊」，27日「紅鬃烈馬」，29日「将相和」「掃討群魔」，31日は「金錢豹」「盤絲洞」「盜魂鈴」。

### 1.6 海外公演

民國65年は米国建国200周年に当たり，その祝賀式典にかけて派遣された団体が多かった。

まず西洋音楽として，7月18日，中山女中校長を団長として米国ノースダ

---

6) 中華民国は，南京が首都であり，清の都で，かつ大陸の共産党政権が首都と呼んでいる北京は，台湾で公的に「京」を用いず「北平」と称していた。当然京劇も，「平劇」が正式な呼称になっていた。

コタ州で開催された国際青年吹奏楽コンクールに参加していた自強少年管楽隊が、最難度のA級Aで第一位になった、この団体はこの後米国十数か所で演奏した後、米国建国200周年式典に参加して帰国する。

一方10月6日には華美少年弦楽団の米国ワシントンでの公演報道。ワシントンの中華民国同学会・中美文化協会共催で1,200人の観客があった。ただし、これらの観客はほぼ華僑と台湾からの留学生だったようだ。10月16日に帰国した。

一方国楽・国劇系では、国劇盟友徐露がシンガポールでの平劇公演成功後帰国し、中華民国の平劇団を東南アジアに多く派遣すべきだと提言した(7.18)。「戲夢人生」の主人公としても著名な傀儡師李天録が8月欧州公演を行ったが、この頃からすでに後継者不足が言われていた。

9月29日、中華国劇団欧州公演、北欧で好評との一報が掲載される。記事では現地の共産党シンパによる抗議活動も有ったとも書いているが、そうした妨害にもかかわらず好評を得たと結んでいる。

中華国劇団は11月には中米に移動、パナマ公演中の記事が出た(11.15)。

12月1日に中華国劇団が米国東南部、西部で1か月公演の様子が紹介される。フロリダ州マイアミ大学、ジョージア州アスコタ大学など3か所の大学で公演、いずれも満席だった。5日にはコスタリカ訪問。

国劇団は伝統的中国文化を海外に紹介するとともに、海外の中国研究者とのパイプ維持にも役立った。台湾訪問中のオーストリア中華文化研究所のウィンクラー教授(会長)は12月22日に内湖の国立復興戲劇学校で国劇を鑑賞、欧州公演から帰国した団員とも歓談した。24日教育部礼堂で海外公演を行った団体に表彰があった。中華綜芸団65人は9月11日から米国西部、中北部、東部で巡回公演3か月半後の23日に帰国、中華国劇団(復興劇校師生がメンバー)45人は9月14日から北欧、中南米、アメリカなどで公演12月21日に帰国したものである。後者は43公演で6万4千人以上を動員、テレビ鑑賞を入れると十万人を超える。前者は前年の米国公演を受け、コロンビアアーティストの招聘によるもので、功夫、気功、民族舞踊などを国楽の伴奏で上演した。

## 1.7 音楽業界

エレクトーン音楽で名を知られた家風レコード（本社台北）が240種台湾懐念的旋律として整理、12のシリーズものとして作成すると発表があった（7.24）。この会社はオスカーエレクトーン全集6集で中国曲を特集した。またエレクトーン音楽アルバム第5集を発売。41～43は台湾民謡。41は「港都夜雨」、42「勸世歌」、43「我有一句話」、37は「過去の春夢」、38「黄色的此基尼」（12.18）。同社は、子供向けレコード「児童世界」を企画、18の児童歌曲の他、子供向けに聞かせる「兔と亀」「桃太郎」「金の斧」も付き、曲の伴奏譜も付く（10.16）。

一方山水レコードは10枚シリーズで名曲集を制作、原版に忠実な音を売り物に訳詞・解説付きであった。第1陣として発売されるのは1）木匠兄妹（カーペンターズ）2）レイ・コニフ男女混声合唱団 3）ポール・モーリア・オーケストラ 4）ヴァイオリン名曲集（8.21）。

海山レコードは劉家昌作曲精華を発売した。これは海山が作曲精華歌唱専集として出しているシリーズの一つ。また香港の有名グループ黎明神の国楽アルバムで、郷土色の強い12の台湾歌曲を収録した。これは揚琴、二胡などの中国楽器に西洋楽器を加えた編成で録音された。海山レコードによれば閩南語衰微の今日、閩南語歌曲も受け入れられにくくなっているが、曾ての曲はそのメロディーを皆知っている。しかしそれらの録音は買いにくい。そこで資料を収集し、古い曲にリズムを変えたり歌手を変えたりして新味を加え発売しようというものである。この時点で発売中の5集は尤雅の「送君情涙」「孤女的願望」など、6集は西卿の「流浪在台北」「暗淡的父」など。既発売の4集は邱蘭芬の「雨夜花」「望你早歸」「港迎情歌」「香港戀情」など、2集も同歌手の「三線路」「川迎春夢」、3集は楊小萍の「離別之夜」など。

クラシックでは、永豊唱片公司（台北信義路）が、米国の最新機器を導入してクラシックの国際標準版を作成すると発表した。世界の名作曲家・名指揮者不朽の作品（カラヤン、トスカニーニ、デ・ワールト、バーンスタインなど）を発売する（12.25）。

## 2. 台南地域に関連する音楽活動

さて次に台南での音楽関係の出来事を見てゆこう。

### 2.1 学校関係

5月31日啓聰学校博愛堂で嘉南薬専のハーモニカ楽団（口琴団）が10周年記念演奏会を開く。この楽団は放送に出演したりレコードを出したりもしているレベルの比較的高い団体で、プログラムはクラシック名曲や映画の主題歌である。

台南の南寧国中で開催の中国語文速読教育大会の後で、成功大学の国楽団が笛を披露した（6.12）。

6月27日には成功国小成功館で、音楽発表会が開催された。第一部は児童による管弦楽、合唱、独奏、第二部は教員の模範演奏、フルート二重奏、モダンダンスなどであった。

4月11日には成功国中の音楽教諭林神辯の指導する学生の演奏会が永福国小で行われた。林教諭は台南で音楽教育に携わって11年、2年に一度同様の会を開いていて彼の生徒40人（幼稚園児から社会人まで含む）が演奏した。

また、学校休暇期間を中心に、救国団は自強運動を主催し、その中に音楽関係のメニューも含まれた。救国団は文芸巡回講座も企画し、ここでも音楽・演劇、舞踏などが含まれていた。

暮には台南市の児童合唱団が台北に出発した。第5回全国児童合唱大会及び研修会参加及び慈湖参拝し霊前献唱のため元日に北上。大会は台北の中山堂で民國66年（1977）1月2日開催、全国の24団体が参加した。児童合唱団は、またACA（アジア児童合唱協会）研修会にも参加した。

### 2.2 社会人

社会人の音楽活動として、まず合唱活動が挙げられる。この前の10年ほどの間に児童合唱を含め多くの合唱隊が次々編成された。全市のもの他、行政区にも合唱団が生まれていった。『台南市音楽発展史』で拾うだけでも、



- |              |   |
|--------------|---|
| 民國 48 (1959) | 台南榮声合唱団   |
| 民國 51 (1962) | 中華兒童合唱団   |
| 民國 56 (1967) | 台南基督教青年会 (YMCA) 兒童合唱団, 後備軍人合唱団 (のちの YMCA 合唱団, 台南合唱団) 台南市国民小学教師合唱団 |
| 民國 62 (1973) | 日本婦女合唱団   |
| 民國 63 (1974) | 台南兒童合唱団, 中区淑女合唱団  |
| 民國 64 (1975) | 鳳凰城合唱団, 北区婦女合唱団   |
| 民國 68 (1979) | 蘭心合唱団   |

といった具合である。

民國 65 年当時の有力な団体について、記事の中で触れられているが (10. 29), まず長老教会の南中女宣合唱団が一番歴史が長く、入団試験もあった。当時のリーダーは 72 歳であった。太平洋女宣合唱団は太平洋基督教長老教会のもので、平均年齢 50 歳以上というのは団員年齢として最高。多くは日本時代に教育を受けた人で、国語は流暢でないがそれでも総統のために歌うと言う。リーダーはやはり 72 歳。これらの団体の二人の 72 歳団員は 10 月 31 日付紙面で写真入りで紹介されてもいる。

行政区のものとしては南区婦女合唱団が各区の合唱隊の中では最古、63 年の創設時には媽媽合唱団、指揮者は大成国中の王金水教員だった。東区婦女合唱団は勝利国小教職員が中心で第 1 回婦女合唱コンクールにも参加した。中区淑女合唱団は民國 63 年の建党 80 年記念で作られた。特徴は未婚者が団員で、結婚すると脱退するため、流動性があり、1 回市の合唱大会で優勝したことがあるが、65 年の大会には新たな顔ぶれが多い。啓聡女教師合唱団は当該校の合唱団。西区婦女合唱団は協進小の教員を中心とする合唱団。北区婦女合唱団は、成立がこれらには遅れるが 80 人以上と最大規模で、5 分の 2 が教員残りは社会人だが、成立 1 年少しで 4 回の演奏会をしていて、民國 65 年代南市社会組音楽コンクールで優勝している (10. 29)。

これらの合唱団は、上記のように構成員の属性が同じではない。民國 65 年にも、団員募集や改変などが見られた。

5月に中区婦人会は、女性の余暇活動充実のため淑女合唱団の拡大を決め、高校生以上の参加が可能となった。

台南神学院には頌音堂があり、そこに合唱隊が存在したが、教会信者という壁を超えて成功大学、神学院、家専に中高生も加えて民國64年(1975)頌音合唱団が作られ、65年も団員を募集している。

YMCA 児童合唱団も、陣容強化のため小学校3年から5年の入団も可とした。この合唱団は外国人教師が指導した。

5月9日には道德重整會中国青年合唱団65人が成功大学成功堂で公演した。この合唱団は9月に、歌に興味があり楽器ができる団員を募集している。

北区婦女合唱団(団員76名)は8月28日中正図書館育樂堂で創設1周年記念演奏会。合唱以外に国術、独唱、舞踊など盛りだくさんで千人以上が参加。

10月30日には大規模な合唱大会も開かれた。永福館で行われ、この年の合唱行事として、規模は最大だった。

## 2.3 巡回公演(西楽)

### 2.3.1 国人

2月に陳泰成のピアノ演奏会が永福館で行われた。陳泰成は高雄出身で、11歳の時全省ピアノコンクールで優勝<sup>7)</sup>、14歳で教育部主管の天才兒童試験を通過して米國留学、その後ヴィーン音楽院を19歳で修了した。この時の演奏会は台南のYMCA企画によるもので、バッハの平均律クラヴィーア曲集、ベートーヴェンの「熱情」ソナタやアルベニスの小品が演奏された。

5月14日には当時数少ないオペラ主体の歌手だったソプラノ陳愷之の独唱会があった。大陸重慶の軍樂專科學校声乐科を卒業して、民國49年(1960)

---

7) 当時の報道では、「中国」「全省」「台湾地區」を冠した各種のコンクールや表彰があるが、基本的に「台湾」でのコンクールという事であり、全省だからといって、金門が排除されているわけではない。本論文では、基本的に原資料の表現を用いることとする。従って原則「中国1位=台湾1位」「全省1位=台湾1位」「地区1位=台湾1位」ということである。

渡伊、声楽教授のディプロマを得た。この時は帰国演奏会ということで、ピアノ伴奏により各国の名曲を歌った。会場は育楽街の救国団青年館で、攻学社で発売するチケットは最高100元、ほか50元、30元のチケットがあった。

8月14日には江蘇省出身で「江南小姐」と言われていたソプラノの潘儀が台湾に帰国公演、台南と高雄では初お目見えとなった。

9月15日、台中青年会聖楽合唱隊が台南の太平境教会でメンデルスゾーンのアラトリオ「エリア」を演奏した。前日にお膝元台中の中興堂で公演したものである。指揮は李君重教授、ソリストは朱安美がソプラノ、陳麗嬋がアルト、欧秀雄がテナー、曾道雄教授がバリトン。勿論原曲はオーケストラ付であるが、この公演は東海大学の戴憲毅教授がピアノで伴奏した。

9月25日、フィリップスエレクトーンの代理店永康企業公司主催のエレクトーン音楽会が開催された。フィリップスのドイツ工場製の最新型GM 762を使用し、当時著名なエレクトーン奏者だった黄英憲が演奏した。デモ音楽会で、22日台北実践堂公演を皮切りに、23日台中中興堂、25日の台南中正図書館と移動し、最後は28日高雄師範学院の公演である。

### 2.3.2 国内団体

2月に国立師範大学音楽隊が永福国小の小礼拝堂で、「アイダ」の凱旋行進曲などを演奏した。教育部の「音楽で社会に奉仕する」精神を歌った全国公演の一環であった。

3月14日には永福館で文化学院音楽系の巡回公演が行われ、ピアノ、重奏、重唱、合唱などに第十期卒業生35人が参加した。台南公演後高雄に移動し、夜の公演も行った。

5月9日にはまた同じ日には前年度全国大専院校音楽コンクール1位の東海大学聖楽隊が永福館で公演、来場者は千人を超え、翌日には長栄中学でも公演があった。

6月29日には台湾大交響楽団演奏会が永福館で行われた。この楽団は大専コンクールで毎年優勝している。曲目はロザムンデ序曲、ジブシー男爵序曲、ハイドンの交響曲第3番、これにピアノソロで「森の情景」が加わった。

8月16日には米国建国200年式典祝賀のため米国25都市で公演予定の華美青少年楽団が出国前の演奏会を中正図書館育楽堂で開いた。指揮は米国公演でも指揮する女流指揮者の郭貞美であった。

11月国立台湾師範大学音楽系の師生による巡回公演が永福館で行われた。無料だが攻学社で入場券を取り扱った。音楽系で公開選抜された最優秀学生が参加、教員も加わった。主催は中華民国音楽学会で、嘉義、台南、台中、台北で演奏した。独唱、重唱、ピアノ、エレクトーン、トランペット、弦楽合奏など。

台北市交響楽団は台南神学院と台南音楽学会主催により、12月13日に永福館で演奏会。指揮は徐頌仁<sup>8)</sup>メンデルスゾーンの「フィンガルの洞窟」序曲、ハイドンのオーボエ協奏曲、シュトラウスの「こうもり」序曲とワルツ「春の声」、リストの交響詩「前奏曲」。

年末募金活動として、12月14日に台南国際合唱団演奏会が開催された。台南市政府、市党部、台南神学院、台南国際聯誼餐会、光華女中、長栄中学、台南基督教大專服務中心など共催。ファニータ女史指揮。聖詩、中国民謡、オペラなど。また18日には台南市東光国小の仁愛工作隊が校長引率下児童合唱団と楽隊師生100余名で旗山養老院、六龜孤兒院、塩行孤兒院などを慰問した。

### 2.3.3 海外団体

2月24日から中正図書館育楽堂でニューヨーク芸術院バレエ団公演が行われた。同団は1956年米国バレエ協会の援助でパリに設立された団体である。

海外バレエ団の公演は、日本では共産圏のバレエ団公演もあったため、稀少とまでは言えなかったが、非共産圏からしか招聘できない戦後の台湾では極めて少なかった。台湾での公演は、民國46年(1957)のサンフランシスコバレエ団、民國56年(1967)のオーストラリアバレエ団、そして民國58年(1969)このニューヨーク芸術バレエ団が行われ、今回再演で4回目である。しかも、

---

8) 徐頌仁は新竹出身、ケルン音大でピアノと指揮を学んだ。のちカッセル市立劇場、更にドルトムント歌劇場で活動後帰国し東呉大学音楽系で教え、台北市交響楽団特約指揮者になった。

前の3回は台北でしか公演が無かったので、台南としては戦後初の本格的な外來バレエ団公演となった。これは遠東音楽社創立20周年事業として補助を受けた台湾招聘であった。報道では入場券は最高200元。ただし、会場の問題で十分な公演ができず台南の公演施設不足を炙り出す結果になった。(後述)

公演後27日に掲載された批評では、概ね好評とはいえ、団員の演技に熱が無く、台南市民のレベルがなめられているのではという意見も紹介された。なお、この演奏会は演奏中の障害を恐れて10歳以下が入場禁止で実施されたが、こういうことは台南の演奏会では極めてまれとも報道されている。

7月6日には中正図書館育樂堂でサレ舞踊団公演。名前はフランス18世紀の名バレリーナに因む。民族舞、バレエ、現代ダンスのプログラム。前年創立された台南児童合唱団が友情出演した。この合唱団は韓国公演もこなした力がある。

#### 2.3.4 反共音楽

5月22日に反共義士<sup>9)</sup>王光達の独唱会が開かれた。彼の父親は大学教授、母親は師範学校卒であり、彼自身雲南大学の芸術系で2年学んだが、文化大革命で芸術家などが下放されていく状況に危険を感じて中文系に転学科した<sup>10)</sup>台湾に渡った後は、民國64年(1975)台湾の国立政治大学新聞系を卒業、この当時は国防部研究員であった。大陸同胞の心の声と謳った詞・曲とも自作の独唱会で、第一部は大陸の下放青年の声を、第二部は台湾の美しさを題材とした抒情歌曲というプログラムであった。

7月25日には王光達独唱会の批評がある。

- 
- 9) 反共義士は、大陸との分断が事実上確定した後、様々な形で中国から台湾に逃れた人で、朝鮮戦争での捕虜や、海外経由の亡命などがあった。中華民国政府は、自由中国を世界向けに宣伝するため、これらの人々を「反共義士」という称号で呼び、仕事の提供や経済的支援などを行っていた。詳しくは拙稿『中華民國80年の台湾—兩岸關係編』も参照されたい。
- 10) 5月22日付で紹介されたものによれば、「大陸の芸術創作は、もはや創作とは言えない。共産党は何の原則も示さないくせに、彼らが反革命だと言い出せば、芸術家に反駁の余地はない。そういう社会で芸術に身を投じる人間はいない」というのが転学科の理由。

彼のアルバムは海風レコードから発売された。

## 2.4 巡回公演（中国音楽・中国劇）

台北の中等学校以上の学生による国楽団が成功大学成功堂で「郷村情歌」や「蔣公紀念歌」などを演奏会で披露したのが2月（2.8）。

この年特記された事として、国立成功大学が入学式での音楽を国楽に変更したことが挙げられる。従来成功大に限らず式典音楽は吹奏楽による西洋音楽だった。これは、明らかに中華文化復興運動への呼応である。3月2日付報道では、国歌・校歌以外の3曲は大学の国楽社（クラブ）による演奏、国歌・校歌の伴奏も同社が担当した。

5月17日には成功大学で中国弦楽器演奏会が開催された。報道で見る限り、協奏曲、弦楽四重奏、ピアノ伴奏による弦楽曲などで、西洋の様式により中国の弦楽器を使って双方融合を意図したものらしい。南部では、この台南公演が初めてであった。

11月2日付紙面は香港の陸秀麟女士が台南を観光で訪れた際に、永福館で台南市党部が主催する国劇公演が有るのを知り、飛び入りで「捉放曹」を演じたと伝えた。陸秀麟は香港在住の華僑で当時52歳。

11月28日屏東師専国楽団が永福館で演奏会を開いた。これは台湾地区コンクールで8回の優勝経験を持つ51人の楽団（含OB）で、陳道南教授の指揮で「還我山河」「春」などの演奏と独奏が披露された。

## 2.5 コンクール

### 2.5.1 西楽

3月2日に台湾地区音楽コンクール台南予選が永福館で開催、1日目午前が小学校、高校、社会人の合唱、午後は中学合唱と国楽、2日目は楽器独奏部門であった。

台南では計1,500人が参加、3日に発表された結果では合唱部門で勝利國小、永福國小が、中学校では成功國中、民徳國中、高校では台南一中、台南二中、職業高校では台南高商と水産高職、社会人は鳳凰城合唱団が入賞し

た<sup>11)</sup> 一方国楽では大光国小と慈幼高商が入賞した。この3月のコンクール結果から、後述するように当時の幾つかの問題状況が見いだせる。

このコンクールは同月中旬の全省コンクールへの緒戦であり、入賞した鳳凰城合唱団は、全省大会向けに新団員募集を開始した。

南部団体決勝は3月23日嘉義で行われ、それを経て全国大会があり、結果4月5日台中図書館中興堂で授賞式があった。ほぼ台北組が団体総合は独占、合唱優等、国楽優等にかろうじて台南師專、国立成功大学が入った。また管楽合奏で永福国小が受賞した。

エレクトーンもこの時期人気を博した楽器である。山葉（ヤマハ）は楽器製造会社として、国際的な大会を行っており、4月25日に山葉電子琴聯歡會台南地区予選が永福館で行われた。嘉南地区で参加した50人から代表4人を選び、このうち社会人の1位は5月の台北での大会に出場、そこで優勝すると東南アジアを含む国際的の第13回山葉電子琴決勝に進むことができる。

交通安全歌曲の南部決勝は10日に永福国中で開催。8縣市24チームが参加。学生組は省政府教育庁、交通処、新聞処、中広交通電台連合主催。嘉義、台南、高雄、澎湖、屏東で一次通過したグループ。1位は台南永福小、2位屏東師專付属、3位台南県永康小、優勝は5校（優勝の方が下）、中学は1位屏東大同中、2位台東寶桑中、3位嘉義興北中。台南では大成、麻豆が優勝校に入る。高校は1位省立嘉義女中、2位省立台南二中。

12月1日には、愛国歌王歌後の嘉南地区決勝戦が中正図書館育樂堂で行われた。

## 2.5.2 国劇・国楽・舞踊

一方舞踊では、4月7日台南市立体育館で民族舞踊コンクールがあり、古典舞踊団体の部は台南女中、中国現代舞踊は小学校の部は博愛国小、優等は西門

---

11) 3日付の報道では、このコンクールの想定外のエピソードに触れている。忠義国小の莊明德という教諭が、自校が選に漏れた結果に憤激し審査委員に猛抗議する事態が発生した。結果、審査結果は覆らなかったが、この教諭に対しては、注意や処分ではなく、その熱情に対して特別賞が贈られることになった、というのである。

国小、中学の部は大成国中。中国民俗舞は新南国小。ほか個人や社会人の入賞があり、優勝者は台南代表として屏東市での南部大会に進んだ。この審査に関して疑義が出たことが14日付けコンクール後評で触れられている。この時純粋な中国舞踊が2位になり、観世音にまつわる新たな舞踊が1位となって、違和感を持たれたのが発端である。一般に多くが民族舞踊というと中国古典劇の舞踊を連想しがちであるが、政府は同時に適切な題材の発掘も推奨しているところだと指摘している。

国劇系では、台湾地区の地方戯劇コンクールの台南市予選が10月18日～11月10日まで行われる。傀儡戲や皮影戲など。南区は省立台南社教館で16団体が参加して行われた。因みに彰化で行われた中区は17団体、北区は17団体の参加であった。

14日には第1回の南部国楽コンクールが永福館で開催。参加は高雄県曹公、嘉義県民族、高雄市金江金、台南市大光、台南県中営の各国小、高雄県大寮、ピントン県明正、高雄市寿山の各国中、省立台南二中、台南県台南高工の各高校、台南市紫嵐国楽団、高雄市三鳳官国楽団。

## 2.6 商業演劇など

台南には映画館以外に常設公演の劇場というものは無く、大飯店や歌庁がショーの形で公演を提供していた。元宝大飯店は定期的にそうしたプログラムを行っていた。3月は台湾の伝統的人形劇である布袋戲で、演目は「六合三侠传」「秘雕百勝棒」、1日3回公演、観劇料は35元。5月は一転、「サロメ」などの舞踊プログラムである。

また台南大歌庁も公演を企画し、5月には映画の主演級を揃えたショーを行っている。

戒厳令下では公演も様々な認可が必要である。上記台南大歌庁が「天鶯総合芸術団」と「寶島之星総合芸術団」（いずれも台北から招聘）公演では、無認可プログラムを上演したとして、団体の登記が取り消されることになった（7.10）。



## 2.7 学会

台南には台南音楽学会が民國 61 年 (1972) に成立、この民國 65 年 6 月に第 4 回大会を開き新役員を選出した。当時の役員は王子妙が理事長、王金水ら 2 名の常務理事ほか 6 理事、3 監事という体制であった。

## 2.8 鑑賞会

中正図書館視聴覚室で解説付きで 7 月 25 日に開催された。11 月はシュトラウスの「美しく青きドナウ」、レハール「ヴィリアの歌」。高橋雅子の 2 曲の独唱、ロッシェニ「泥棒かささぎ」序曲、リストのピアノ協奏曲、パガニーニのヴァイオリン協奏曲第 2 番などであった。

また 9 月 24 日には同じ中正図書館で大同音楽図書館主催の古典音楽欣賞会が行われた。プログラムはチャイコフスキーのスラブ行進曲、ボロディンの「韃靼人の踊り」、モーツァルトの木管 8 重奏セレナーデ、リストの交響詩「前奏曲」。大同音楽図書館は大同電音傘下のもので、台南にもサービスセンターが有る。この組織は鑑賞会を毎月各処で行っており、この月は新竹、台中、台南、高雄で開催した。

## 3. 台南の音楽生活

### 3.1 インフラ

市民は主としてどこで音楽活動に触れたのか。2 で使用されている会場は、永福館が最も多く、次に中正図書館の育楽堂であった。学校内の○○館や○○堂は、特別な建物ではなく日本で言う体育館(講堂)のようなものに過ぎない。永福小は 3 で触れるがマンモス校なので、畢竟体育館の収容人数も大きいというわけである。

音楽会場として、他に台南神学院の頌楽堂、啓聰学校の博愛堂、成功大学の成功堂、救国団の青年館が使用されている。『台南市音楽発展史』によれば、戦後の台南では、初期には延平戯場、市政府大礼堂、社教館大礼堂程度であったようだが<sup>12)</sup> 民國 50 年代後半から上記の会場が次第に整備され、更に遅れて

12) 台南市文化中心は改築され今年 2018 年再開館予定である。

台南市立文化中心演芸庁や台南師範学院（現台南大学）の雅音院、国立台南社教館の演芸庁などが整備され、県下でも新営などに文化中心が設けられる。

これらのほとんどは多目的ホールであった。このうち民國64年（1975）10月、中正図書館（現市立図書館）の育樂堂が完成する。図書館内の施設とはいえ、1,000人以上収容される会場は台南地区の音楽関係者の大きな期待を背負っていた。それで、多目的ホールではあっても、完成時市民には音楽ホールと呼ばれていた。ところがこのホールが音楽的に相当不備であることが、早々に明らかになった。1月16日付報道では、そもそも構想段階でホールの反響は配慮されておらず、電気拡声装置は配置されているが、生の音は、天井が高すぎてしかもそこが布で覆われているため音を吸って不鮮明な響きを呈していること、音量も減殺されていることが指摘され、既に演奏した演奏家から台南市で最低の会場とまで言われていると指摘されている（1.6）。

この民國65年2月、ニューヨーク芸術院バレエ団の公演は、舞台の奥行不足、照明設備の不備で吊り背景で処理せざるを得ず、台北公演・台中公演と違った演出で行わざるを得なかった。音響の不備で録音が使用できず、急遽攻学社から2台のピアノをレンタルして生演奏とはいえないピアノ伴奏による公演になったのである。

### 3.2 音楽教育

3月のコンクール後の批評記事で、台南の音楽状況について幾つかの問題が指摘されている。第一に、参加人数自体は1,500人と多く見えるが、参加校は多くない。合唱部門では市内14中学が全部参加しているものの、小学校は32校中13校のみ、高校は公立8校のうち6校、私立に至っては12校のうち2校のみの参加である。さらに国楽は高校と小学校計2校しか参加が無かった。記事の分析では、特に小学校での音楽教育の遅れ、音楽教員の不足と音楽軽視（高校で専任の音楽教諭が在籍するのはわずかに3校）を指摘している。

音楽教育については、全国的に大きな問題が生じていた。大きくは教員の不足と教育課程の削減である。

そもそも日本時代に配されていた音楽教員の強制帰国で中国人教員に交代す

るが、音楽専科教員は圧倒的に不足し、大抵は数教科兼担状態だった。師範系学校で音楽教員も育成されたが、まず主要教科に重点があったのはやむをえない。師範教育の結果小学校での不足幅が少しずつは沈静化したはずであるが、そこに中学校の義務教育化がぶつかった。これによって教員不足は全教科に亘る問題となっていた。

教育課程はもともと民國30年(1941)、ということは当然中国大陸の中華民國政府教育部が定めた課程が、戦後の台湾では適用された。1週間に小学校低学年60分2コマ、中学年以上90分2コマ、中学校同時間2コマ、高校1コマである。それが民國50年(1961)の改訂で、低学年は体育やダンスと合わせて180分、中学年以上80分、中高は旧課程に同じとなった<sup>13)</sup>

記事で問題にしているのは民國64年(1975)からの新課程で、低学年は160分、中学年以上80分、中高は1コマに削減されたことである。これ以前から、中学受験、中学校の義務教育化以降は高校受験、大学受験のため公然と主要教科以外の授業時間は主要教科に流用されており、ある意味で、そうした教育環境の追認の色彩があることも否定できない<sup>14)</sup>

台湾の音楽教育の問題点について、台湾省交響楽団の指揮に台湾を訪れた米国人指揮者が述べている。才能のある子供も、そのトレーニングが高校で中断してしまう。光仁小学校・中学校に音楽実験班があっても、これも大学入試前に止めてしまう。と述べた。また彼は台湾のオーケストラには、西洋音楽の紹介と同時に、中国文化の特色を示す義務がある。台湾の大学やオーケストラの若い人は多く欧米に出て勉強することを考えているが、そうした人は帰国して成果を還元すべきである。また演奏家は成果のため大量の弟子を抱えていて、そのことが演奏家の音楽に障害を及ぼしている、と指摘した。中国伝統云々は政府にやや迎合した意見と見ることもできる(6.29)。

1で見た音楽実験班活動は、教育部が全国僅か3校で試行を進めていたものであるが、台南市では、これとは別に民國65年に中正図書館に児童音楽班が

13) データは陳偉民『台中県音楽発展史』(台中県立文化中心:民國78)による。

14) 美術も同じ状態で、民國67年(1978)以降、中高の美術は週1時間減少し、小学校では美術+労作で週4時間あったのが、併せて2時間に削減されることになっていた。

設置され、小学校1，2年生50人程度を募集し、音楽教師が指導する8か月のプログラムを開設することとなった(10.31)。12月には活動を開始したことが具体的に報じられている。林栄徳、鍾明昆ら4教師が順番に指導。最初4か月は基本動作訓練、後半は各種歌唱と楽理。方法は完全にドイツの児童音楽教育法を採用。他に8名の台南師専の学生がマンツーマンで指導する。設立の趣旨は教員ではなく一般人の音楽教育で、特に経済的理由で才能ある児童を漏らさぬよう、という趣旨だと言う。

台南の場合は校外公的施設での教育が開始されたわけだが、そもそも音楽教育に力を入れた学校は存在した。『台南市史卷5教育志(上)』<sup>15)</sup>教育施設編で市内各校が紹介されている。そこでは小学校32校(市立31、省立・私立各1)のうち3小学校を、音楽面で全国的に著名な小学校として挙げている。

一つは東区の勝利国小(元竹園公学校)で、民國54年(1965)音楽重点補導校に指定された。所謂マンモス校で(当時としては特別ではないが)、6学年で73クラスあり、児童数は4,000人を超えていた。ここは学年ごとに楽隊があり、学年ごとにピアノコンクール、ヴァイオリンコンクールが行われて、民國56年(1967)以降3年連続で、台南市音楽コンクールで優勝した。またこの学校の女教師合唱団は台南市1位として全国大会でも入賞したことがある。

二つ目は北区の大光国小である。民國57年(1968)に大光国楽団を作り、同年6月に省教育庁が芸能科示範校に指定された。中華文化復興運動に呼応してできた大光児童国楽団は台南を代表して台湾省や台湾地区の国楽コンクールに出場し、1、2位を取ったこともあり、公開演奏会も開き、こうした成果が行政院新聞局を通じて海外にも流された。

三つめは中区の永福国小(元南門尋常小学校)。ここもマンモス校で6学年71クラス、児童数4,400人、民國57年(1968)に体育館を兼ねる永福館が完成した。台南市の音楽コンクールで管弦楽団が十連覇し、台湾地区でも何回も1位になって、国外でも演奏したことがある。5、6年生による合唱団(約

---

15) 民國68年、台南市政府刊行。

60名)も台南で何度も優勝し、全国でも優等となったことがある。31台のエレクトーンを配した風琴教室も置かれるなど設備も恵まれていた。

一方中学校26校(市立13, 省立3, 私立10)では、音楽科が特記されたのは延平国中だけだが、ほかに後甲国中が市で合唱1位になったこともあり、民徳国中も合唱団を擁していた。勿論ミッション系の私立高では音楽教育に古くから力を入れている所も有った。

ただ、全体的には、まだまだ受験向け教育が最重要課題だった時期で、音楽教育に十分な環境だったとは言えないであろう。

学校での音楽教育の限界から、特に個人の器楽教育は民間の事業に頼ることを余儀なくされた。民國65年当時は、日本のヤマハ系列の音楽教室が台南でも展開される。児童音楽班と称して4~7歳児に音感、リズム感を植え付けるもの、教室への応募は30元、週1回3年間で3か月ごとに660元の費用がかかる。この時点では台北に5教室、台中、高雄、各2教室、鳳山市1教室、台南では中正路に山葉音楽台南教室が存在した。

音楽を学ぶ際の楽譜を求める場合、勿論一般書店ではかなり限られたものしか望めない。台北であれば、この時期衡陽路の大陸書店が最大の音楽専門書店であったが、台南では1の林栄徳の教室である林栄徳音楽教育教材研究中心があった。また台南ではしばしばチケット販売店として登場した攻学社の存在が大きい。もともと楽器店であるが、上述ヤマハ系教室はこの会社で行われていたし、何より民國50年(1961)に『音楽月刊』という音楽専門誌を創刊した。この雑誌は勿論全国的に販売されたもので台湾人の音楽関係の知識を啓蒙するのに少なからず力が有ったものではあるが、こうした見識ある音楽商の存在は台南の音楽生活をより豊かにしたと言えよう。

### 3.3 音楽・国劇公演

当時の台南の人々にとって、音楽に触れる機会は放送を除くと、プロの公演、学校団体の公演、コンクールである。台湾全土でも、外来演奏家はまだまだ多いとは言えなかったうえ、ほぼ台北に集中している。民國65年当時は、台北から台南までは中山高速か、国鉄だよりで、4~5時間は要した上、演奏会場

の収容能力を考えると、たとえばオペラのような大規模な団体公演は難しい。たとえ来られても、ニューヨーク芸術院バレエ団公演が示すように、設備の制約から本来の演出での上演はできなかった。国内の団体でも、大学などの学校オーケストラや合唱団のようにほぼ報酬を要さないものが主であった<sup>16)</sup>

メンデルゾーンの「エリア」のように、日本でも本格上演は稀な大曲を紹介する意欲的な試みもあるが、このケースも、ピアノ伴奏で済ませるほかなかった。

ただ、ピアノやヴァイオリンなど小編成のプロの演奏は、2か月に一度程度とはいえ提供されていて、比較的移動が簡単な高雄など近隣都市の公演まで視野に入れば、それなりに本格的演奏に触れる機会はあったと言える。また攻学社という熱心な音楽業者の存在は楽譜・楽書や音源の入手の際、市民には頼りとなった筈である。

そうは言っても、演奏曲目を見ると、例えば仮に、「序曲などの小曲1－協奏曲1－交響曲1」という日本でも一時期まで定番だったオーケストラ演奏会の曲目を基準に考えるなら、序曲など小品が複数とか間にピアノ独奏をはさむなどの、地方向けプログラムになっていたのがうかがえる。

国楽については、数だけで見ると公演はそれほど多くないように見えるが、歌仔戲などは市中の祭祀によく披露されていて、わざわざ報道の対象とするものでなかったと解釈すべきであろう。しかし、学校現場や公の場ではやはり挺入れしなければ西洋音楽に押されてしまうという状況が存在していた。

#### 4. 結 語

本稿では、まず台湾全土に関する音楽状況、次いで台南市とその近郊の行事、更に台南での音楽環境について見てきた。

1960年代くらいまでの日本の地方都市の状況に似ている点は少なくない。会場の不備、学生団体主体の実演、ポピュラー指向のプログラム、伝統音楽の

---

16) 台南で本格的にオーケストラを用いて歌劇が上演されたのは、民國75年(1986)実業家許文龍氏の後押しで行われた、モーツァルトの「バスティアンとバスティエンス」(於市民文化中心)であった。

公的な場からのゆるやかな減少傾向などである。

一方で、音楽報道の上で、政治的な影響が見て取れる。例えば、小学生のコンクール出場の際蒋介石の遺体が置かれた慈湖で敬意を示すことに触れたり、合唱団の紹介に当たり、国語がうまく喋れない団員ではあるが総統のために心を込め歌うと記述したりしている。

また中華文化復興運動と連動するものとして、大学行事での国楽利用、或いはコンクールの受賞理由に、中国の調性を重視したことが評価されたと表記したり (1.2)、コンクールで国楽部門の参加校が少ないことを問題視する論評 (3.2) があつたりという点に現れている。

なお、所謂ポピュラー音楽、歌謡曲と言った部類については今回の考究に含めることができなかったが、そうした分野や21世紀の地方都市の音楽現況については引き続き考えてゆきたい。